

平成 27 年度 東京外国語大学オープンアカデミー

東京外国語大学語学研究所 企画

『言葉とその周辺をきわめる -4- 』

2015 年 11 月 17 日 (火) 第 6 回

「クレスィ (Kresy) のポーランド語 —歴史と現在」

東京外国語大学大学院准教授

森田 耕司

みなさん、はじめまして。東京外国語大学でポーランド語を担当しております森田と申します。本日はよろしくお願ひいたします。今回、「言葉とその周辺をきわめる」というテーマを伺った時、言葉とその周辺というのはいろいろな解釈ができるのでどういふお話をしようかなと考えました。あれこれ考えましたが、私の場合、自分の専門の関係で、ポーランド語とその周辺地域について、今回はお話をさせていただくことにしました。

私は学生時代から、ポーランド国内で話されているポーランド語ではなく、ポーランド国外で話されているポーランド語を中心に研究しています。ポーランド語には、ポーランド国外のある地域を指す Kresy (クレスィ) という表現があります。Kresy とは一体どういふ意味なのか困惑されたかと思いますが、今回は Kresy とは何を意味するのか、そして、その Kresy という地域で使われているポーランド語を中心にお話をさせていただきます。つまり、現在のポーランド国内で使われているポーランド語ではなく、Kresy という地域で使われているポーランド語、その歴史と現在についてのお話になります。

この講座に参加されているみなさんのなかには、言語について非常に詳しい方が多いと伺っておりますので、かつてポーランド語を勉強された経験をお持ちの方もいらっしゃるかと思いますが、まずはポーランドとはどんな国かということをご説明いたします。

まず地理的にどこにあるかですが、ポーランドの北はバルト海に面して、西はドイツと接しています。中央ヨーロッパ地域の東側に位置しており、EU の国境の一部を占めています。人口は約 3,800 万人です。民族は基本的にスラヴ系であるポーランド人ですが、少数民族もいます。公用語はスラヴ系言語であるポーランド語です。また、敬虔なカトリック教国としても知られています。

日本とポーランドの関係は良好で、ポーランドが親日国であるともよく言われます。今回の話とは直接関係ありませんが、今回是非取り上げておきたかったのが、2016年1月14日から LOT ポーランド航空の成田～ワルシャワ直行便が就航を開始することです。途中乗り継ぎなしの約 10 時間でワルシャワへ行けるといふ夢のような時代が始まります。これまではヨーロッパの近隣諸国の主要都市を経由してしかポーランドへは行けませんでした。ポーランドと日本の距離がどんどん縮まってきたということですね。

ところで、この機会にみなさんにお伺いしたいのですが、ポーランドについて連想されることやご存知のことはおありでしょうか。例えば、ポーランドの歴史からですと、いわゆる「ポーランド分割」によって、ポーランドが 123 年間 (1795～1918) 地図から姿を消してしまったことは周知の通りです。ポーランドの領土がプロイセン、オーストリア、ロシアの 3 国により分割支配されて、ポーランドという国がなくなってしまったのです。また、ポーランド出身の著名人としては、ノーベル平和賞を受賞した元大統領のレフ・ワレサ (ポーランド語では「ヴァウエンサ」)、映画監督のアンジェイ・ワイダ (ポーランド語では「ヴァイダ」)、音楽家のショパン、物理学者・化学者としてノーベル賞を受賞したキュリー夫人、スラヴ人として初のローマ法王となったヨハネ・パウロ 2 世、地動説を提唱したコペルニクスなどがよく挙げられますね。

Kresy (クレスィ) とは何か

さて本題に入ります。Kresy とは何かということでした。まず Kresy という言葉の定義です。ポーランド語の名詞 Kres はもともと「端、はずれ、境界、(時間的な) 限界、終り」という意味があります。この Kres に語尾 y がついたものが、複数形 Kresy です。ポーランド語の重要な辞書の一つである 1958 年から 1969 年の間に刊行されたドロシェフスキ編集の『ポーランド語辞典』によれば、「複数のみ、古語」であり、意味は「国境の防衛線、国境警備隊；ドニエプル川河口やドニエストル川下流に拠点を置いていたコサック、タタール軍との国境線」とあり、やはり「境目、端、土地の終り」ということです。比較的新しい 2003 年刊行の『ポーランド語ユニバーサル辞典』を見ると、少し定義が違って、「複数のみ」は変わらないのですが、「古語」とは書いてありません。「国境近くに位置する国の一部分；国境地帯 (特にポーランド旧東部国境地帯)」となっています。つまり、現在の国境地帯よりも古い戦前の国境地帯を指します。そして、

日本語の文献で **Kresy** の定義について書いたものがないか探してみたところ、一つだけ見つかりました。『世界民族問題事典』(平凡社)に **Kresy** という見出し語があり、見つけた時は個人的に感動した覚えがあります。早稲田大学の伊東孝之先生が解説を書いています。それによると「ポーランド語で辺境を指す。ドイツ語のマルクに対応。ドイツ語の **Kreis**<輪>の意から来ており、ポーランド語では <終わり><棒線>を意味する。**Kresy** はドニエストル川上流北域とウクライナの国境地帯に配置された物見と伝令を指した。それはタタールやコサックの襲撃に備えて国境を守ると同時に、手紙や警戒信号を送る役割を果たした。当番は交替制で<棒線>がだれかに当たると順番にやることになっていたことから、名前が由来する。ドニエプルからドニエストルまでステップを貫いて走る国境監視所の線がこうした一繋ぎりの物見の鎖だったので、俗語でしばしばクレスイという言葉にポーランドをザポロージェのコサック、タタール人、ワラキア人から隔てる国境という意味を含ませた。東方クレスイ、クレスイ出身などというが、だいたい東方辺境の意であって、ドイツとの国境地帯、チェコやハンガリーとの国境地帯を指すことはあまりなかった(今日ではある)。ポーランドの東隣はロシアではなくリトアニア大公国だったので、クレスイは具体的にはポーランドが同君連合によって併合したリトアニア大公国の諸地方(リトアニア、ベラルーシ、ウクライナ)を指した。(省略)」とあります。ドイツとの国境のことは「西のクレスイ」と言う場合が多いですね。単に「クレスイ」ですと自動的に東の国境のことを指すことになり、語頭を大文字で書くことが多いです。ポーランドの東隣は、かつてはリトアニア大公国の領土でした。したがって、これからお話するクレスイのポーランド語というのは、現在のリトアニア、ベラルーシ、ウクライナの地域で話されているポーランド語ということになります。続けて『世界民族問題事典』には、「これらの地のポーランド人は本来のポーランド人というよりも、土着の支配階級がカトリックの教えとポーランド文化を受け入れてポーランド人となったので、異教徒であるロシア正教徒、ユダヤ人、その他からなる環境において、ポーランド人としてのアイデンティティを守り抜かなければならなかったため、彼らのポーランド人意識は本来のポーランド人意識よりも研ぎ澄まされ、ポーランドの文化や政治に大きな影響を与えることになった。ミツケヴィチ、スウォヴァツキ、ピウスツキなど、18~20世紀のポーランドの主だった文人、政治家はほとんどクレスイ出身である。クレスイにはユダヤ人が多かったが、ポーランド文化に貢献したユダヤ人も広い意味でのクレスイ出身者に含めること

ができよう。クレスィの体験、テーマはポーランド文学、思想、政治などによって大きなインスピレーションの源だった。」とあります。つまり、クレスィというのはポーランド語では語頭をよく大文字で書きますが、東の国境地域、東方の辺境地域という意味になります。ですからクレスィのポーランド語というと東方辺境地域あるいは旧東部国境地域のポーランド語ということになりますね。

クレスィのポーランド語

そして、クレスィのポーランド語ということで、この分野の先駆的研究および私自身の研究についてご紹介させていただきます。

クレスィの定義を「東部辺境地域」として話を進めます。ポーランドは18世紀後半にプロイセン、オーストリア、ロシアに分割されましたが、1918年によく独立します。1919年から1939年までは現在のリトアニアの首都ヴィルニウスもポーランド領でした。現在のベラルーシの首都ミンスクもポーランドの東部国境からそれほど遠くはありませんでした。つまり、現在のリトアニアの一部地域もベラルーシの一部地域もポーランド領だったのです。そして、現在のウクライナの西部もポーランド領でした。第二次世界大戦後に現在のポーランドの国境に定まりました。現在のポーランドの西部地域はドイツ領でした。かつてはドイツ人が住んでいましたが、戦後ポーランド領になってしまったのでドイツ人は引き揚げました。そのかつてドイツ人がいた地域に、現在のリトアニア、ベラルーシ、ウクライナの一部地域から引き揚げたポーランド人を政策的に移住させることになったのです。したがって、現在のポーランド西部地域は非常に複雑な状況になっています。ただ、農民は土地に執着がありましたので、ポーランドではなくなったのですが、現在のリトアニア南東部、ベラルーシ西部、ウクライナ西部の地域に現在も計100万人以上のポーランド系住民が残っているそうです。これらの地域に残っているポーランド系住民の方言を私は調査しました。リトアニアとベラルーシが私の専門だったのですが、1920年代や30年代に生まれ育った人々が現在どのような方言を話しているかに興味がありました。現在では主に、①リトアニアとベラルーシ（北東部辺境地域）のポーランド語、②ウクライナ（南東部辺境地域）のポーランド語に大きく二分されます。リトアニアとベラルーシで話されているポーランド語には共通性が高いので、①と②に分けて研究されています。1990年代にソ連が崩壊して東欧が民主化され、ポーランドの研究者たちも自由に出入りできるようになったので、その頃から多くの研究者が調査を始め

ました。私も 90 年代半ばから調査に加わりました。私は当時ワルシャワに住み、ワルシャワで博士論文を執筆しておりましたので、研究チームにも加わって北東部辺境地域に何度も足を運びました。1990 年代半ばから 2000 年代前半は、研究の最盛期でした。ソ連時代、ポーランドの研究者はこれらの地域に自由に入出入りできませんでしたが、ソ連で出版されていた方言地図でもこれらの地域は空白のままでした。ポーランド語が話されていることが認められていなかったのです。ポーランド人が住んでいる地域ではポーランド語が絶対に話されているはずだということで、ポーランドの研究者が次から次へとこれらの地域に入って調査をしました。これらの地域のポーランド語についてはかなり明らかになってきて、今となっては調査しつくされた感がありますが、最近では中央アジアやシベリアに移住したポーランド人の言語状況にまで調査対象が広がっています。私も最近シベリアに興味がありまして、まもなく、シベリアへ調査に行く予定です。

ちなみに、1920～30 年代のポーランド領には、リトアニア人、ベラルーシ人、ウクライナ人、ユダヤ人もたくさんいましたので、当時のポーランドはかなりの多民族国家でした。

先駆的研究

1920 年代、ヴィルニユス周辺がポーランド領だった時代に、この地域のポーランド語の調査はすでに始まっていました。ワルシャワは常に政治の中心でしたが、ヴィルニユスは文化の中心でした。ヴィルニユスのことをポーランド語ではヴィルノと言います。ヴィルノ大学は当時のポーランドを代表する大学の一つでした。ヴィルノ、ポーランドの古都クラクフ、そして現在ウクライナ領にあるルヴフは、ポーランドの三大文化都市と言われていました。今でも年配の人々はヴィルノやルヴフを懐かしがってよく訪れます。それはドイツ人が第二次大戦後引き揚げたヴロツワフなどの都市を懐かしがって訪れるのとよく似ていますね。

この分野の先駆的研究は、1925 年に Kazimierz Nitsch という言語学者が発表した「ヴィルノ地方におけるポーランド語」という論文です。そのあと、ヴィルノ大学教授の Halina Turska が 1930 年に「ヴィルノ地方におけるポーランド語」という論文を発表しました。1939 年には同じく Halina Turska が「ヴィルノ地方におけるポーランド語圏の発生について」という論文を発表しました。このように重要な研究が 1920～30 年代にすでになされてきました。戦後、東欧の民主化とソ連の崩壊にともないポーランドの研究者が調査に入ったのですが、それまでは

ソ連の研究者による研究のみでした。1973年に初めて『ソ連におけるポーランド語方言』という2巻本がミンスクで刊行されました。ただ、検閲をようやく通過して出版された本なので、内容については批判もされていますが、ソ連の研究者がソ連領内のポーランド語方言をテーマに公刊した初の本格的な研究書です。『東部辺境地域のポーランド語研究』というシリーズ本は、1982年に発行された第1巻では、まだ民主化もソ連崩壊もなされていなかったため、掲載された論文は戦前の先駆的研究の再録が主でした。1990年代以降に発行されたものにはポーランドの研究者が新たに調査した研究成果も発表されています。私自身もかつてこの雑誌にベラルーシでの調査結果を2度発表した経験があります。1990年代に入ると、1993年に『16世紀から20世紀の北東部辺境地域とヴィルノ地方のポーランド語』という研究書も出版されるようになりました。あとは、1996年に『北東部辺境地域のポーランド語方言テキスト』という音声表記による方言テキスト集が出版されました。これ以降、数えきれないほどの研究書が出版されています。ポーランド政府も旧ポーランド領のポーランド人の状況を調査することは重要な研究テーマだと考えていましたので、研究費を助成していました。かつてほどの勢いはありませんが、現在も様々な研究成果が発表されています。2006年ですが、私が調査した結果を出版した研究書『リトアニア（トラカイ地方）とベラルーシ（イヴァネツ地方）のポーランド系コミュニティにおける社会言語学的変容—対照研究』があります。この本は、2005年にポーランド科学アカデミーのスラヴ学研究所に提出した博士論文を加筆訂正後、ワルシャワで出版したものです。内容を少し紹介させていただきます。私はクレスィの北半分の地域に興味があり、リトアニア地域とベラルーシ地域で何らかの差があるのではないかと考えました。なぜならこれらの地域は、リトアニア地域はリトアニア語の影響があるし、他方ベラルーシ地域はソ連の影響でロシア語も使われていてリトアニア語の影響はあまりないだろうと思ったからです。トラカイという町とその周辺、イヴァネツという町とその周辺、この2つの土地の方言を調査して比較すると何らかの差があるのではないかと考えました。それまでは伝統的にリトアニアとベラルーシを北東部辺境地域として一括りにすることが多かったのですが、北東部辺境地域の方言でも、この2つの土地に違いがあることを客観的に証明したいと思ったわけです。したがって、ポーランド人が密集して居住している代表的な土地を2つ選んで、それぞれを調査しました。私が調査した頃は、それぞれの土地は、すでにリトアニアとベラルーシのそれぞれの国に属していました。私がターゲッ

トにしていた 1920 年代と 1930 年代、つまり、これらの地域がまだポーランド領だった時代に生まれ育ったポーランド人たちが保存している方言ですので、調査はかなり大変でした。ソ連時代に生まれ育った人たちは違った外部からの影響を受けているので、調査は難しいのです。1920 年代と 1930 年代に生まれ育って、ずっとそこに住んでいた人々であれば、当時の方言を保存しているかもしれないということです。その年代の人々は農民が多く、特に女性はその地域の中でずっと生活していた人が多いので、そういう人々がターゲットでした。ただ、平均寿命の関係で男性のインフォーマントはみつからず、大半が女性のインフォーマントでした。男性は兵役などで外に出ることがあり外界の影響を受けている場合が多かったので、地域にずっと残っている方言を調査したかった私にとって、女性のインフォーマントというのは良い点ではありました。インフォーマントに聞き取り調査をしてそれを録音し、録音したものを音声表記でテキスト化して、音声や形態の特徴を調べて、現在の標準ポーランド語とどこがどう違うのかを比較することがまず一つ目的としてありました。そして、リトアニア地域のポーランド語とベラルーシ地域のポーランド語を比較して方言同士の差異を見つけること、質的な違いを何らかの形で証明するというのもう一つの目的でした。先ほどご紹介した私の本の内容ですが、これはリトアニアのトラカイ地方とベラルーシのイヴァネツ地方のポーランド系コミュニティにおけるフィールド調査に基づいて、方言学・社会言語学的手法を組み合わせで行った対照研究です。主な目的は、戦前ポーランド領であった両地域のポーランド語方言を記述し、対照させることによって、その共通点および相違点を見出すことと、それらの方言間に質的相違が見られた場合、その相違の原因を方言学や社会言語学の観点から明らかにすることでした。失われつつある方言ですから、まず記述することが大切だったので

調査地域

リトアニアのトラカイ地方にある村々と、ベラルーシのイヴァネツ地方にある村々に数回ずつ行きました。リトアニアはいつでもビザなしで自由に行けたのですが、ベラルーシは毎回ビザをとる必要があったので大変でした。調査へ出かける時は、録音のために録音機とカセットテープを 20 本くらい持って行きましたが、国境でたまに荷物検査があったので、スパイ扱いされたらどうしようかと考えて毎回緊張しました。村にはホテルはないので、村内の民家に泊めてもらい

ます。今は小さくて軽い便利な IC レコーダーなどの録音機がありますが、当時はカセットテープも必要でしたので、荷物は多かったです。

それぞれの地域の言語状況ですが、トラカイ地方は大まかにいうと 4 言語地域です。スラヴ語系のベラルーシ語、ポーランド語、ロシア語とバルト語系のリトアニア語です。それに対して、イヴァネツ地方は 3 言語地域です。スラヴ語系のベラルーシ語、ポーランド語、ロシア語です。役所や病院などの公的機関ではロシア語がよく使われています。トラカイ地方はリトアニア語の影響がありますが、イヴァネツ地方ではリトアニア語の影響はありません。リトアニアの首都ヴィルニウスでは今でもポーランド語が通じますし、ロシア語も通じます。特に年配の方はポーランド語をよく知っています。

主な言語的特徴

言語の特徴については、わかりやすい例の一つとして、動詞の人称語尾変化について若干ご説明いたします。

- ・動詞一人称複数現在形語尾 **-Vm** の使用

方言形 < 標準形 「日本語訳」

mówim < **mówimy** 「私たちは言います」

patrzym < **patrzymy** 「私たちは見ます」

słyszym < **słyszemy** 「私たちは聞きます」

- ・動詞一人称複数過去形語尾 **-lim** の使用

方言形 < 標準形 「日本語訳」

uczylim < **uczyliśmy** 「私たちは教えました」

bralim < **braliśmy** 「私たちは取りました」

rozmawialim < **rozmawialiśmy** 「私たちは話し合いました」

標準形と方言形では明らかな違いがあります。ロシア語の影響が強いと推測がつかます。「私たちは～した」という時に語尾が **m** で終わるパターンはロシア語と同じパターンですね。

音声について今回は書きませんでした。音声についてはリトアニア語の影響が強いという結果も出ていました。あと、リトアニア語は分詞の使い方がかなり

豊富です。その影響ではないかという意見がありますが、この地域のポーランド語も分詞の使い方が豊富なのです。私の調査でも、リトアニア側の方言では特殊な分詞の使用がかなり出てきましたが、ベラルーシ側では全く出てきませんでした。限られたデータからの分析ですので絶対とは断言できませんが、リトアニア語の影響ではないかと考えられている分詞についてはベラルーシ側では出てきませんでした。

もう少し簡単な例を挙げると、標準ポーランド語では、1人称・2人称の人称代名詞を使いません。通常は動詞の人称語尾を使って人称を表現していますので、特に強調する必要がない限り、人称代名詞は使いません。ところが、この地域のポーランド語方言では人称代名詞を使うことが一般的で、ロシア語は人称代名詞を必ず入れますので、その影響だとも考えられます。したがって、標準形と方言形で違いがはっきり出てきています。方言形はおそらく東スラヴ諸語、ベラルーシ語やロシア語の影響を受けているという推測ができます。いわゆる言語接触ですね。過去にまでさかのぼると様々な民族が共存していた地域です。ポーランドが最も栄えた時代は16世紀だったので、様々な言語、民族、宗教が入り混じって生活していた時代です。リトアニア語、ベラルーシ語、ロシア語と常に接触していた結果ではないでしょうか。

まとめ

クレスィという東部辺境地域の方言には、現在のポーランド国内の諸方言とは一線を画している特徴が挙げられます。現在のポーランド国内は大きく分けると5つあるいは6つの方言グループがあるのですが、それらの方言とは異なるということです。ただ、リトアニア地域とベラルーシ地域とでポーランド語がどう違うかという場合にポイントとなってくるのは、ポーランド語を第一言語すなわち母語として使用しているかどうかという違いです。その違いに注目する必要があります。あとは、リトアニア語と常に接触しているか。同じスラヴ語同士の接触ではなく、違った系統であるバルト語系のリトアニア語と接触しているかどうかというのも大きなポイントです。それから、戦前の知識人階層が一部でも残って住んでいるかどうかというポイントです。これらのポイントによる違いが、私の調査したリトアニアとベラルーシのポーランド語の違いにどのように現れてくるかということが興味深いところです。私の調査結果では、先ほどお話ししたように、リトアニアのトラカイ地方のポーランド語には典型的なポーランド北東部

方言の特徴が見られました。そしてベラルーシはどうかというと、イヴァネツ地方のポーランド語はなぜか標準ポーランド語に近かったのです。3つのポイントとどのように関連してくるのでしょうか。リトアニアの方はポーランド語の保存状態が良かったのです。なぜかと考えた時に、まずポーランド語を母語とする人が多かったのです。家庭でもポーランド語を話している人ですね。地元のカトリック教会の司祭は地元の事情をよく知っていますから、調査に行くとまず地元の教会に行きます。ミサはポーランド語とリトアニア語の2言語なのです。「～時からポーランド語、～時からリトアニア語」という感じです。ポーランド人に会いたいということで、ポーランド語のミサの時間に教会に行ったのですが、ミサが終わると教会から人がぞろぞろ出てきて話をしているのです。皆さん本当にポーランド語が上手でした。ワルシャワのポーランド語と変わらないくらい彼らのポーランド語に違和感がありませんでした。その理由はまず、ポーランド語を母語として生活している人が多いということです。授業をポーランド語で行っている学校もあるのです。あと、トラカイという町はかつて知識人も多数住んでいたということもあります。国境が変わっても、北東部辺境地域の住民は日常的にポーランド語の北東部方言を話していましたので、ポーランド領時代から引き継いだポーランドの北東部方言がそのまま残ったのではないかと推測されます。ベラルーシの方は、実際に調査してみると、ポーランド語を母語としている人はほとんどいませんでした。「私はポーランド人です」とみなさんおっしゃるのですが、ポーランド語で自由に会話できる人はほとんどいませんでした。普段はベラルーシ語の方言で会話しているのです。アイデンティティはポーランド人ですが、普段の話し言葉はベラルーシ語の方言ということになります。カトリック教徒なので、教会ではポーランド語を話さなければならないし、ポーランド語は神聖な言葉であるというステイタスはありました。葬儀などの宗教的な儀式でもポーランド語を話し、ミサなどもポーランド語です。司祭ともポーランド語で話そうとします。ポーランドからやってきた親戚やお客さんとはポーランド語で話すけれども、普段の生活ではベラルーシ語を話すという具合です。ポーランド語を授業言語とする学校もありませんでした。どうして標準ポーランド語に近いかというと、これは私の推測ですが、普段ポーランド語を話さないがために、ポーランド語の知識をどこから吸収したかということ、標準ポーランド語が使われている教材や本、もしくは司祭などが話すポーランド語から学ぶ以外になかったからです。家族との普段の会話からは学べないのです。ですからここで話されているポーランド語

は教科書などに載っている標準ポーランド語に近いのです。リトアニア地域では日常会話がポーランド語なので普段の話し言葉がそのまま引き継がれて、ポーランドの北東部方言も引き継がれている一方で、ベラルーシ地域では標準ポーランド語に近いポーランド語が使われている。先ほどご紹介した私の拙著にある結論はだいたいそういうことになります。

宗教との関係について

リトアニアはカトリックの国です。ポーランドもカトリックの国ですね。ベラルーシはいろいろな宗教があるのですが、基本的には東方正教会の国です。リトアニアは宗教がカトリックなので、宗教の面から自分がリトアニア人ではなくポーランド人であるというアイデンティティを求められません。ですから、自分がポーランド人であるというアイデンティティをどこに求めるかという、言語になるのではないかと私は思います。自分はポーランド語を話すからポーランド人であるということです。ベラルーシは宗教が違っていたために、カトリック教徒＝ポーランド人ということで、言語自体はそれほど重要ではなかったと考えられます。ポーランド語が話せなくてもポーランド人でいられたということです。この地域では以前から「ポーランド人はカトリック教徒である」というステレオタイプが合言葉のように浸透しています。つまり、ポーランド語を話す人＝ポーランド人、ではなくて、カトリック教徒＝ポーランド人ということです。リトアニアの方は先ほど申し上げましたように、リトアニア人もポーランド人もカトリック教徒ですから、カトリック教徒であるということで自分がポーランド人であると意識することはちょっと難しいと思われれます。そのかわり、自分はポーランド語を話しているからポーランド人なのだという意識はあると思います。宗教と言語とアイデンティティの関係からすると、このような見方も可能かと思えます。ベラルーシに行った時に「あなたはポーランド語を話していませんがどうしてポーランド人なのですか」と質問をしたところ、「私はカトリック教徒だからです」という答えがよく返ってきて、なるほどと納得したものでした。その他にもいろいろな質問をしました。「あなたはポーランド語を話していないようですが、どういう場所でポーランド語を話すのですか」と質問したら、「教会で話します。」という答えでした。あちらでは死者を埋葬する時に女性が何人かで棺桶を囲んで弔いの歌を歌う習慣があるのですが、その時の歌もポーランド語でした。彼女たちの手書きの歌詞集を見せてもらったなら、やはりポーランド語でした。「今あな

たが話しているベラルーシ語では歌わないのですか」と尋ねたところ、「とんでもない。ベラルーシ語は俗っぽい言葉なのでベラルーシ語で歌うなんてとんでもない。神聖なポーランド語で歌います。」という答えが返ってきました。つまり、ポーランド語＝カトリック＝神聖な言語という図式ができていているわけですね。ベラルーシ語は普段の日常会話の言語であって、あまり品は良くないという位置づけなのでしょうか。ベラルーシの調査結果は私にとっても少々ショックでした。村に住んでいるポーランド人を紹介されて家々を訪れるのですが、みんなベラルーシ語の方言を話していてポーランド語を話す人はほとんどいませんでした。ですからコミュニケーションにはかなり苦労しました。でも民族を尋ねると「私はポーランド人です」と答えるのです。ですから、ベラルーシでは、第一言語はポーランド語ではありませんでした。リトアニアでは家族や隣人との日常会話がポーランド語という人が多かったために、話し言葉としてのポーランド語にいろいろな方言も残っていました。それに対してベラルーシでは、普段ポーランド語で話していないので、ポーランド語の知識は教科書などから得ており、したがって方言的な特徴が少ないということになります。

2009年に大修館書店から刊行されました『事典 世界のことば141』という本がありまして、私は「ポーランド語」の項目と「ポーランド語を話す人々」というコラムを担当しました。コラムでは今回のクレスィの話を取り上げました。よろしければ、この本をお読みいただければと思います。リトアニアにあるポーランド人が多く住んでいる村に行った時、リトアニアのお祭りがあったので様々な民族衣装で歌う合唱団がいたのですが、彼らの歌がなんとすべてポーランド語だったのです。リトアニアにいるのにまるでポーランドにいるかのような錯覚に陥り、それは私にとって「カルチャーショック」でした。当時、私はポーランドに10年ほど住んでいたのですが、そんな私にとっても衝撃的でした。いろいろな民族が共存していて言語も宗教もいろいろで、クレスィというのは本当に興味深い地域です。

最後にいくつか文献をご紹介します。クレスィの研究は専門誌が出るほど活発に研究されていることがお分かりいただけるかと思えます。

・ *Studia nad polszczyzną kresową* (東部辺境地域のポーランド語研究)

このシリーズ本は12巻まで出ています。私の調査結果も2つ掲載させていただきました。リトアニア、ベラルーシ、ウクライナ、最近では中央アジアやシベリアまで、ポーランドよりも東の地域で使われているポーランド語についての研究

を網羅しています。

・ *Język polski dawnych Kresów Wschodnich* (旧東部辺境地域のポーランド語)

これもシリーズ本で5巻まで出ています。主にリトアニアとベラルーシで使われているポーランド語についての専門誌です。現在は研究がしつくされている感がありますが、当初は新しい村を発見するとか、新しい村にどんどん調査に入るという勢いがありました。したがって、分厚いものもあります。今はもう、誰も入っていない村を見つけることは難しいと思います。なかには墓地の写真が表紙になっているものがありますが、墓地を見るとその土地の歴史がわかります。墓地は動かせませんから、戦前から残っている墓地もあります。墓碑にはポーランド語が刻まれています。墓地も重要なポイントです。村に行ったらまず教会に行き神父さんに会って状況を訊く。そして墓地に行きます。

・ *Acta Baltico-Slavica*

これはバルト・スラヴ研究の専門誌です。現編集長がクレスィの専門家なので、最近クレスィに関する研究論文がかなり多くなっていますが、バルト・スラヴ地域の言語接触に関する研究成果が大半を占めています。最近はこのような雑誌もインターネット上で読めるようになっています。

以上、早足でお話させていただきましたが、これで終わります。本日はどうもありがとうございました。(完)

コラム 十 シベリアに生きるポーランド人たち—歴史と現在



ヴェルシナ村のポーランド人たち

… * * * ————— * * * …

みなさんはシベリアでもポーランド人が生活していることをご存知でしょうか。すでに申し上げましたが、私はそもそも学生時代からポーランド国外、特に旧ソ連領で話されているポーランド語に関心があり、これまでもリトアニアやベラルーシ、いわゆるクレスィ (Kresy) のポーランド語について調査・研究してきました。研究していて明らかになってきたことは、ポーランド語を話す人々はさらに東の中央アジアやシベリアにもいるということです。

例えば、東シベリアの都市イルクーツクから 120 キロほど北上したところに、ヴェルシナ (ロシア語: Вершина) という、ポーランド系の住民が大半を占める村があるので、最近調査に出かけました。一般的に「シベリア」と聞くと、何となく帝政ロシア時代における政治犯の流刑地という暗いイメージばかりが先行しますが、この村の住民は 20 世紀初めのストルイピン改革により、生活の糧を求めてポーランドの南部地方から 1910 年 5 月以降自主的に移住してきた人々と

その子孫たちなのです。当時のロシア政府は、シベリアへ移住する者には土地を無償で提供、新生活を始めるにあたっての一時金の無利子貸与とシベリアまでの鉄道運賃の割引などの厚遇により、支配下にあったあらゆる民族にシベリアへの移住を促したのです。

この村の住民たちは、1910年から100年以上にわたって、ロシア語の荒波にも負けず、村ではポーランド人として、ポーランド語を使い続けてきました。現在この村には、カトリック教会やポーランド文化会館もあり、教会ではポーランドからやってきた司祭がポーランド語でミサや他の宗教行事を執り行っています。お店でもポーランド語が通じるので、シベリアにいるはずなのに、まるでポーランドにいるような不思議な気分になります。

